

Sky Seminar



オフィス環境の整備と ホワイトカラーのモチベーション

いまや全就業者数の50%以上がホワイトカラーだと言われている。工場部門での生産性向上が既に限界に達している昨今、ホワイトカラーの生産性向上が急務である。工場など生産現場では、最新鋭の機器や技術を導入することで生産性をある程度向上させることができた。では、ホワイトカラーが働いているオフィスではどうか。機能的なオフィス家具や最新の各種情報機器を導入すれば、それがそのままホワイトカラーの生産性向上に貢献するのだろうか。私の研究はこのような問題意識に端を発している。

1986年に、旧通産省は「ニューオフィス化運動」なるものを展開し、快適性や機能性、独自性を反映したオフィス環境の整備を促進し

た。そこで多くの企業が最新のオフィス家具や情報機器を導入し、その結果、オフィスアメニティの充実などに代表される表面的なオフィス環境の改善例が多数見られた。各企業はオフィスに対する投資により、ホワイトカラーの生産性向上を目指したのである。しかし、期待するような結果を得ることはほとんどなかった。さらに、ホワイトカラーの生産性をどのようにして測定すればいいかという点について、学問的にも実務的にもコンセンサスがとれていない状況でもあった。

ホワイトカラーの産出物を概に決めるのは困難なので、彼らの生産性を財務的なアウトプットベースでとらえることは難しい。それ故、ホ

イトカラーの生産性指標はほとんど存在しないのである。そこで私は、ホワイトカラーの生産性を「アイデア創出度」「情報交換度」「モチベーション」の見地から考えることにした。これらはホワイトカラーの最終的な産出物ではないが、これらが高まることにより、結果的にホワイトカラーのアウトプットの水準が向上すると考えただけである。

約20年間、延べ5千人以上のホワイトカラーへのアンケート調査の結果、オフィス環境が「情報交換度」「モチベーション」に影響することがある程度はつきりしてきた。IT技術の発達により、最新鋭の情報機器やネットワークを導入すれば、それが情報交換度にプラスに貢献する。ことは理解しやすい。

では、モチベーションに対してはどうなっているのか。私は「どうもモチベーションを会社の帰属意識+仕事への意欲と定義している。そして、帰属意識が高まって初めて仕事への意欲がわいてくる」と考えている。近年、一般的な住環境が快適なものとなっているため、少なくともオフィス環境がそれ以上にならない限り、会社への帰属意識は高まらないという点である。つまり、オフィス環境の整備は、優秀なホワイトカラーをオフィスに呼び寄せ、「モチベーションを活性化させるための必要条件」なのである。

私の専門分野はこのような経営学領域であるが、実際のオフィス環境の整備などには建築学や空間デザイン論の知識が必要である。具体的にホワイトカラーの生産性向上を目指すならば、学際的な見地から問題に取り組み、解決策を模索しなければならないだろう。

古川 靖洋

関西学院大学
総合政策学部教授

ふるかわ やすひろ

1962年神戸市生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。慶應義塾大学商学研究科後期博士課程修了。商学博士。通産省企業経営力委員会委員、厚労省在宅勤務実態調査委員会委員、環境省環境配慮契約法基本方針検討会O/A機器WG委員などを歴任。著書「創造的オフィス環境」。情報社会の生産性向上要因（いずれも千倉書房）、父親はメルボルン五輪三日連続泳金メダリストの古川勝氏。



西宮上ヶ原キャンパス
〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町1番155号
神学部 文学部 社会学部 法学部 経済学部 商学部 人間福祉学部 国際学部(2010年4月 開設構想中)

西宮聖和キャンパス
〒662-0827 兵庫県西宮市岡田山7-54
教育学部(2009年4月 開設)

神戸三田キャンパス(KSC)
〒669-1337 兵庫県三田市学園2丁目1番地
総合政策学部 理工学部